劍客物語

子母澤　寛

劍客物語

子母澤　寛

文藝春秋新社

劍客物語

著者略歴
明治35年北海道に生る。
讀賣、毎日各新聞記者を經て文筆生活に入る。主要著書に「勝海舟」「すっとび龍」「父子鷹」「愛猿記」「小説のタネ」等がある。
現住所　藤澤市鵠沼 6350

昭和三十二年八月二十日　印刷
昭和三十二年八月三十一日　発行

定價　二四〇圓

著作者　子母澤　寛
發行者　車谷　弘
印刷者　川口芳太郎
發行所　文藝春秋新社
東京都中央區銀座西八ノ四
振替口座東京七八七四三番

印刷　圖書印刷
製本　福神製本

萬一落丁亂丁の際はお買求の書店又は發行所にてお取換致します

© 1957 Kan Shimozawa　Printed in Japan

目

次

雪の中の燕……七
今紫物語……二九
おぢ様お手が……四九
奇女のぶ……六三
彰義隊の井……七三
むかし小判の落葉……九五
宵のしらたま……二二五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

劍客物語……一四三
西から來た男……一四四
他流試合……一五一
花と花……一六一
小稻のこと……一七一
日本一のもの……一八一
雲……一九〇
落葉……一九九
謙道老師年譜……二四一

劍客物語

雪の中の燕

幕末に外國奉行をした川路左衞門尉聖謨は、官軍江戸入城の時に、根岸御行の松の下屋敷で自殺した。まだ朝の中で、一度厠へ入り、それから出て來ると居間へ坐つて

「素湯を持て」と夫人おさとに命じた。おさとが何氣なくこの湯をとりに行つてゐると、突然短銃の音がしたので、驚愕して引返して見ると、聖謨は喉を射貫いて鮮血にまみれてすでに絶命してゐた。

大騒ぎになつたが最早詮方もなく、やがて納棺のため湯灌をする事となつて、衣類をぬがせると、眞新しい木綿できつく幾重にも腹を卷いてあるのを發見した。

これを解くと、淺く一文字に切つてある。傍らに短刀が置いてあつた。厠の内で切つたものであつた。この短刀といふのは、かつて勘定組頭格として仙石騒動を裁斷した時に、自分をその位置まで拔擢してくれた恩人、播州龍野侯脇坂中務大輔から貰つたものだつたといふ。

この時、聖謨年六十八。からだはでつぷりと肥り輕い中風にかゝつて半身不隨。眼はどちらかと云へば出つ張り目と見える程に大きく、紅ら顔であつた。

年はとつてゐるし、からだは不自由であるが、どうしても官軍の前に手をつく心にはなれない。それ迄の敬齋といふを改めて、自ら頑民齋と號した。

勝海舟はこの人を「川路聖謨は低い身分の出だからこすくていけないよ」と云ひ、藤田東湖の紹介で逢つた横井小楠は「果して非常の英物なり」と書いてゐる。頑民と自稱する位だから、海舟と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

は凡そ性格が合はなかつたらう。

筆者はこの人の事蹟を忍ぶ度に、いつもかういふ話を思ひ出す。毎年定つて農家の廣土間の軒下に飛んで來る一つがひの燕があつた。ここで子を產んで日々をすごしてゐる中に、子燕はひとり飛びが出來るやうになると、やがてこの親子は、他の多くの燕たちと共に、樂しげな群れをなして暖い南の空に飛んで行つた。

その年もまたその燕は來たが、やがて冬が近くなつて、他の燕たちはみんな行つて終つたのに、一夫婦とその子だけが殘つてゐる。どうしたのだらう、どうしたのだらうと、みんな云つてゐる中に、野には眞っ白く霜の下りるやうな日が來た。燕はやつぱり行かない。やがてちら〳〵と雪が降つて來た。が、その雪の中をかすめるやうに飛んで親燕が、餌を拾ひつゞけて、日が暮れようとする事さへある。

それから幾日か、やつぱり親燕の二羽は飛んでゐたが、ある日、妙にかう淋しいので氣をつけると、どうも一羽よりゐない樣子だ。

誰かゞ一羽が遠く遠く雪の空を飛び去るのを見たといふ。それからまた幾日か經つとどうも燕はゐないらしいので、農家の人が夜になつて梯子をかけて巢の內を覗くと、そこにあるものは、片羽根がなく、しかも片脚が胸へくつついてゐるやうな恰好の不具の子燕の、しかも、もう冷めたくなつてゐる姿だけが殘されてあつた。

親達はどうにかしてこの子燕をつれて、みんなと一緒に南へ飛んで行きたかつたのであらう。もう一日、もう一日。そしてたうとう雪になつて終つたのである。

恐らくは、その丹精の甲斐もなく子燕の死んだのを知つて、最初に飛び去つたのは父親であらう。母はそれから尙ほ一日二日の間、この子をあたゝめ諦め切れずに殘つてゐたのだらう。そして泣いて泣いて、涙の枯れる迄泣いて、たうとう、死んだ子を置いて自分も飛去つたに違ひない。

しかし、空はもう雪である。友達はすでに遠く去つてゐる。この二羽は果して目ざすところ迄、無事に着けたかどうか、願はくはせめて無事に着いてくれゝばいゝが——。

聖謨は、燕が子の愛に溺れて、みんなと一緒に南へ行く事が出來なかつたやうに、德川家の恩顧に溺れて、所詮は抗し切れる筈のない世の流れと知り乍らもそれについては行けなかつた。そして自から頑民と名乘つて、雪の大空に倒れて終つた。

筆者は不思議に何んのかかはり合ひもないこの二つの話が結びついてならない。

聖謨は生涯に四人の妻を迎へた。

一番先の夫人は嫁して間もなく病氣で亡くなつた。聖謨は

「わが二十歲の時にて、何事も御實父母のなし下されたるにより、別に論なし」

といふ。如何にも然樣だらう。二度目は廿二の時に迎へて三十四歲迄十三年の間一緒であつた。この間に一男二女が生れ、聖謨も勘定留役助から寺社奉行吟味物調役、御勘定組頭格まで立身した。

この時になつて、やつと侍一人、仲間、下女と三人の家來が出來て小石川船河原橋に屋敷を求めて住むやうになつた。はじめて身上を持つたといふ譯である。

「才氣有りていはゆる男まさりの女にて、且殊の外に、母上樣の思召にも叶たれば、家事等すべてまかせ切なりし也。わが勝手向よろしく、用人、侍、下女等召仕候に隨いて、妻の勢だん〳〵つのり、氣まゝに成り、捨置難く候て、兒三人有しを離緣せし也」

離緣の是否はともかく、今の世の妻女にも斯うした事はよくある。主人の出世につれておのれも肩で風を切る、本當によくありさうである。ところが、その頃、聖謨の母はもう朝夕佛事ばかりにかゝりきりだつたが、夫人がゐなくなつたとなると萬事を引受けてやらなくてはならないから大變苦勞になる。これを見かねたので

「穩を主として選びて」

西丸御持與力高橋七兵衞といふ人の姉を迎へたが、これは一年餘りで離別した。聖謨は

「穩と申迄にて、惡事はなけれど、下女其外取扱も出來ず、諸事に廻りかね候て、餘儀なく離緣して、衣類其外拵遣し候品々は申に及ばず、母上の思召にて、再緣入用の含にて金子迄御めぐみ有し也」

といふ。封建時代の妻女といふものに對する考へ方がよくわかつて面白い。

聖謨は當時勘定吟味役で人の出入が殊更に多く母も心配するので、どうしようと思つてゐたら、

組頭の都築駿河守の世話で、松平安藝守の奥の若年寄をつとめてゐた琴井といふ女を暇をとらせて後妻とする事となつた。聖謨三十八歳。これが最後まで一緒だつたおさと女である。母が疲れて病氣をしてゐる。その上に西丸が火事でその造營の材木を伐出すために、聖謨は俄かに木曾へ出張を命じられた。

「急に呼迎へて嫁參候三日目に出立したり。よりて母上再び御佛事のみ成されたるに、おのつから御健に成らせられ、御長壽も成され候」

このおさと女は餘程聖謨の氣にあつたと見え

「母上、わが江戸に居候節かくれさせ玉ひし時、百事みなおさと取扱也」

と書いてゐる。

「つら〳〵今迄世間の婦人を見るに、これは伶俐也、よき妻也とおもひ居たるに、三十四五より行跡敗れて、實をそこなひたるもの數人をみる」

と家庭の女の危機を論じてゐるが、ある人の奥方の書いた日記をよみ、その才におどろいて、その御主人へその事をいつて

「清少納言にして雅樂に長じ玉ひたる如し」

とほめたところ、その御主人が

「何んのこと、今は世に亡いものだから申すが、實は餘りの不屈に刀の柄へ二三遍も手をかけた

事がある」

といふ意味の事をいつたといふ。その奥方は和漢の學は元より雅樂など知らぬ事はなかつたさうである。聖謨はこれを餘程深く感じたと見えて、一子の太郎といふのへ話してきかせてゐる。

聖謨は四人の妻を迎へるやうな事になつた自分を世にも不幸なものであるといつてゐるが、二番目に迎へた男まさりの人には餘程苦しんだ様子で

「妻と申候ものは、譬ば夫は陽にて妻は陰なり、これ家事に附夫婦一對にて少も缺くべからざるは勿論なり。いにしへの婦人、夫を輔くるもの多し、別て小身の者は妻を以て、家老にも局にも惣兼帶さすこと故、尤も大切也」

と云つて

「まかせ勝ちなること故に、役に立つとおもふ女ほど」

遂には離緣しなくてはならぬやうな事になるものだと嘆いてゐる。

「よつて法則は微々たる小事といへ共、男子より割出し、其事をうけ行はしむる様にすべし。其事、事々物々、嚴ならざれば增長するに至る也」

聖謨の實父内藤吉兵衞といふ人は代官所の屈吏で、聖謨は川路家へ養子になつたものだが、この吉兵衞といふ人がひどく妻女にやかましく

「女房のいふ事はよい事でもきかない」

といつたので、聖謨が若い時

「さう一概に仰せられるのはお間違ひではないでせうか。善と惡とをよく御取捨なさるのが本當と思ひます」

と論じたところ、父は

「さうではない。お前もやがて女房を貰うて體驗をして見ればわかるだらう」

といつた。聖謨は父から妻女についてかうした教育を受けて育つた。だから後ちに

「實に御確論にて、御尤なる御ことゝおもひ候。決して油斷すべからず」

と「遺書」の中にある。

この聖謨は、女房といふものゝ如何によつては、自分ばかりではない、世の主人なるものゝ勤め向きにもかゝはり、引いては家事不取締だの、嬶天下だのと、他人にうしろ指をさゝれる始末になるからといふので、女といふものについては、深い關心をもつてゐたやうだ。

四十六歳で奈良奉行をしてゐる頃、ある日、密夫を殺した事件で、白洲へその女を呼出した。事件の内容はわからないが、とにかく自分の亭主の外に男を拵へた。それが何にか都合が惡くなつて今度はその情夫を殺害したといふ下手人。その話に妖しげな色氣がある。とにかく男女の情事が発端だ。聖謨はどんな女だらうと思つて、ぢつとその女を見てびつくりしたのである。

「いかなる美人かと思ひしに、奈良には珍らしき醜婦にて、柚子もて作れる狆につぶらな眼つけ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com